

平和フォーラム開催される

4月14日 於聞法会館多目的ホール



第1部 鼎談のようす



メッセージを読み上げる総長

戦後80年にあたり、宗派が主催する平和フォーラムが4月14日に聞法会館3階多目的ホールで開催された。

11時15分から開会式が行われ、園城義孝総長が「戦後80年にあたっての平和を願うメッセージ」を読み上げた（次頁に全文掲載・4頁は英訳）。

続く第1部の鼎談では「仏教の可能性を未来に開く」戦後80年、「平和」創造

に向けて」をテーマに、相愛学園の釈徹宗学園長、本願寺史料研究所の赤松徹眞所長、浄土真宗本願寺派総合研究所の寺本知正副所長が、各々の立場から平和の実現に向け仏教が果たす役割について語った。165人が会場参加、同時にオンライン配信も行われ、346人が視聴した。

第2部は15時30分より、宗派が製作した太田隆文監督による映画「ドキュメンタリー 沖縄戦」知られざる悲しみの記憶」が上映された。

社会部にジェンダー平等推進課を設置

4月1日付、社会部にジェンダー平等に関する施策に重点的に取り組む専門部門として、ジェンダー平等推進課が設置された。

「ジェンダー平等推進委員会に関すること」「ジェンダー平等推進実行計画の推進に関すること」を所掌する。

戦後80年にあたっての平和を願うメッセージ

本年は、戦後80年にあたります。まず、先の戦争において、亡くなられた世界のすべての方々に、心からの哀悼の意を表しますとともに、また、戦争で家族を失い、家を失い、さまざまな辛苦を受けられた方々の苦難はいかばかりであったかと拝察いたします。

戦争は、いのちを奪い、いのちの尊厳を踏みにじることを国と国との間で集団的に行うという、人間の愚かさが最も惨たらしいかたちで現れる行為です。第二次大戦ではアジア・太平洋で、そして世界の各地で、当時の敵も味方も、戦闘員に限らず多くの市民が犠牲となりました。日本の地でも、沖縄は凄惨な地上戦を経験し、広島と長崎は原爆によって人もまちも破壊され、また東京や大阪などの都市をはじめ多くのまちも空襲に焼かれました。しかしながら、その戦争に協力し、戦争を賛美したことも、私たち教団の歴史です。

「さるべき業縁のもよほさば、いかなるふるまひもすべし」と親鸞聖人がお示しになられたように、み教えに照らされ知らされてくる私たちのまことの姿は、状況次第でどのような悲惨な行いもなってしまう可能性を持つ、なんともあさましい姿です。だからこそ、悲惨な行いを導いてしまうような状況を決してつくりだしてはならないのです。

戦後、私たち教団は全戦没者追悼法要をはじめ、さまざまに平和の実現へ取り組んでまいりました。一方で、戦争を経験していない世代が人口のほとんどを占めるようになった今日、戦争がもたらした痛苦の記憶は遠いものとなりつつあります。当時の国や社会の状況を批判することなく、それが正しいことであるかのように取り違えてしまった私たちの歴史を省みて、「念仏のみぞまことにておはします」との親鸞聖人のお言葉をよりどころとして、慚愧の念をいだいて、過去を風化させてはなりません。

私たちは、過去・現在・未来のすべてのいのちは、仏に願われ生かされていることに気づかせていただくのです。過ぎ去った方々を敬い、いまの私たちに大切に、さらにこれから生まれるいのちに願いを伝えなくてはなりません。

先人たちが語り伝えてくださった、戦争による辛く苦しい体験を無駄にせず、語り継いでいくことができるのが私たちの教団であり、いまもなお、この瞬間さえも世界の各地で行われている戦争や紛争での人々の苦しみや悲しみに思いを寄せ、自らの生きざまに反映し、お念仏申して、次の世代に伝えていくことが、私たちの教団の大切な役割と考えます。

過去を反省し、問い続け、私たちがいま何をなすことができるか、将来の世代に何を残していくかが大切でしょう。戦後80年にあたって、平和を願うメッセージといたします。

2025（令和7）年4月14日

浄土真宗本願寺派

総長 園 城 義 孝

A Message for Peace to Commemorate 80 Years Since the End of World War II

This year marks the 80th year since the end of World War II. First and foremost, I offer my heartfelt condolences to all those around the world who lost their lives in that devastating war. I also express my deepest sympathy to those who suffered unimaginable hardship—losing family, homes, and enduring countless forms of sorrow—due to the war.

War is a collective act carried out between nations that takes lives and tramples upon the dignity of life. It is a tragic expression of human ignorance and foolishness in its most horrific form. During World War II, in Asia, the Pacific, and across the globe, both allies and enemies alike—combatants and civilians—suffered tremendous losses. On Japanese soil, Okinawa experienced a devastating ground battle. The atomic bombings of Hiroshima and Nagasaki annihilated both people and entire cities. Tokyo, Osaka, and many other cities were reduced to ashes through air raids. And yet, it is part of our history as a Buddhist organization that we once cooperated with and even glorified that war.

Shinran Shonin stated, “If the karmic cause so prompts us, we will commit any kind of act.” When illuminated by the Buddha’s teaching, we come to see our true selves—beings so easily swayed by circumstances that we are capable of the most tragic and shameful acts. Precisely because of this, we must never again allow such conditions to arise.

Since the end of the war, our organization has engaged in various efforts to realize peace, including an annual memorial service for all who died in the war. However, as those with no direct experience of war now make up the majority of the population, the painful memories of war are gradually fading. We must not forget our past—a past in which we failed to question the national and social context of that time, and mistook what was wrong for what was right. We must hold a deep sense of remorse and strive never to let our past fade away, guided by Shinran Shonin’s words, “The nembutsu alone is true and real.”

We are awakened to the reality that all life—past, present, and future—is embraced by the compassionate vow of the Buddha. We must honor those who came before us, cherish those living now, and convey our aspirations to those yet to be born.

Our organization should carry forward the painful stories of war passed down to us by our predecessors so that their experiences will not be in vain. People around the world continue to suffer from wars and conflicts even at this very moment. It is our important role as a Buddhist organization to sympathize with their pain and sorrow, deeply reflect on ourselves, and pass on the Nembutsu to the next generation.

Continuously reflecting on the past, questioning ourselves, and considering what we can do now and what we can leave behind for future generations—these are the matters of true importance. On the 80th-year commemoration of the end of the war, I offer this message for peace.

April 14, 2025

Governor General SONOKI Giko
Jodo Shinshu Hongwanji-ha

本願寺史第四巻がついに完成
—15年をかけて本文編完結—

増補改訂 本願寺史

親鸞聖人750回大遠忌を機縁として、これまでの研究成果を反映させ、半世紀ぶりにより充実した形で再編纂した増補改訂版。本願寺史料研究所 編



最新刊
第四巻

「増補改訂 本願寺史 第四巻」登場!

第四巻では勝如宗主継職から概ね2000(平成12)年までを対象に叙述し、勝如宗主・即如宗主・専如門主のご事績に加え、教団組織・主たる法要・教化団体・国際伝道・教育機関・社会活動・同朋運動・平和運動など多岐にわたるテーマから教団全体について体系的に取り上げ、本願寺教団の近現代史を振り返る。

A5判/908頁/函入 8,800円(税込)

第一巻	既刊	第二巻	既刊	第三巻	既刊
親鸞聖人のご生涯から戦国時代末期までの中世における本願寺教団の成立とあゆみについて。		安土・桃山時代から江戸時代末期までの近世における本願寺教団のあゆみについて。		幕末維新时期から昭和初期までの本願寺教団の近代化に伴う動向について。	
A5判/626頁/函入 5,500円(税込)		A5判/726頁/函入 5,500円(税込)		A5判/736頁/函入 5,500円(税込)	

浄土真宗の根本と伝統 — 先師の歩まれた道が明らかになる

浄土真宗聖典全書

第一巻 三経七祖篇 浄土三部経および七祖聖教	1,428頁 6,600円(税込)	第二巻 宗祖篇 上 宗祖著述	1,214頁 5,500円(税込)
第三巻 宗祖篇 下 宗祖著述及び付点聖教	1,210頁 6,050円(税込)	第四巻 相伝篇 上 覚如上人・存覚上人著述	1,566頁 7,150円(税込)
第五巻 相伝篇 下 蓮如上人著述および関連聖教	1,456頁 9,900円(税込)	第六巻 補遺篇 第一巻～第五巻までの収録内容を補完する典籍・史資料集	1,564頁 7,150円(税込)

本願寺出版社 0120-464-583 FAX 075-341-7753
〒600-8501 京都市下京区堀川通花屋町下ル(西本願寺) <https://hongwanji-shuppan.com/>

発送梱包手数料
無料

